球面間の固有関数写像の構成 上野慶介 (山形大学)

以下,単位球面 S^m には標準的なリーマン計量が入っているものとする. 球面から球面への調和写像については次の結果が基本的である.

定理.(Takahashi) $\varphi:S^m\to S^n$ と包含写像 $i:S^n\to {\bf R}^{n+1}$ に対して $\Phi=i\circ\varphi:S^m\to {\bf R}^{n+1}$ とおく.このとき

$$\varphi: S^m \to S^n$$
が調和写像 $\iff \Delta_{S^m} \Phi = 2e(\varphi)\Phi, \|\Phi(x)\| = 1 \ (x \in S^m).$

特に , $\varphi:S^m\to S^n$ のエネルギー密度関数 $e(\varphi)$ が定数のとき , Φ の各成分は Δ_{S^m} の固有関数になる .

定義.写像 $\varphi:S^m\to S^n$ が固有関数写像であるとは, φ は調和写像であり,かつ,エネルギー密度関数 $e(\varphi)$ が定数になるときをいう.

 Δ_{S^m} の固有値は $\lambda_k=k(m+k-1)$ $(k\in {f N})$ であたえられ, λ_k に属する固有関数は ${f R}^{m+1}$ 上の k 次の調和斉次多項式の S^m への制限であたえられる.したがって

固有関数写像 $\varphi: S^m \to S^n$ の構成

$$\Longleftrightarrow \sum_{i=1}^{n+1}\Phi(x)^2=\|x\|^{2k}$$
となる k 次の調和斉次多項式 $\{\Phi_i\}_{i=1}^{n+1}$ の組を見つける

なる対応がある.またこのとき,調和斉次多項式の次数を固有関数写像の次数という.

定義 . $\varphi:S^m\to S^n$ が full であるとは , ${\rm Im}\varphi$ がどんな (n-1) 次元球面 S^{n-1} にも含まれないことである .

いま $\mathcal{H}(m+1,k) = \{\mathbf{R}^{m+1} \perp \mathbf{0} k \text{ 次の調和斉次多項式 }\}$ とおくとき ,

$$\varphi: S^m \to S^n h^r \text{ full} \Longrightarrow n < \dim \mathcal{H}(m+1,k) - 1$$

とくに dim $\mathcal{H}(m+1,2) = \frac{1}{2}m(m+3)$

以下,次数2の固有関数写像の構成法について述べる.固有関数写像の構成について知られている結果のほとんどは,次数が2の場合であるが,その理由の1つが次に定義するorthogonal multiplication の存在である.

定義 . $F: \mathbf{R}^{p+1} \times \mathbf{R}^{q+1} \to \mathbf{R}^r$ が orthogonal multiplication であるとは , F は bilinear map であって

$$||F(x,y)|| = ||x|| ||y||$$
 $(x \in \mathbf{R}^{p+1}, y \in \mathbf{R}^{q+1})$

が成り立つこと.

とくに p=q で orthogonal multiplication $F:\mathbf{R}^{p+1} imes\mathbf{R}^{p+1} o\mathbf{R}^r$ が存在するならば ,

$$\varphi_F(x,y) = (\|x\|^2 - \|y\|^2, 2F(x,y))$$

により次数 2 の固有関数写像 $\varphi_F:S^{2p+1}\to S^r$ が定義される.これを Hopf construction とよぶ.

例.(1) $\mathbf{R}^2=\mathbf{C}$ とみて, $F:\mathbf{R}^2\times\mathbf{R}^2\to\mathbf{R}^2$ を F(x,y)=xy $(x,y\in\mathbf{C})$ で定義する.このとき $\varphi_F:S^3\to S^2$ は Hopf fiber になる.

(2) $\mathbf{R}^4=\mathbf{H}$ とみて, $F:\mathbf{R}^4\times\mathbf{R}^4\to\mathbf{R}^4$ を F(x,y)=xy $(x,y\in\mathbf{H})$ で定義する.このとき $\varphi_F:S^7\to S^4$.

次に full orthogonal multiplication $F: \mathbf{R}^{p+1} \times \mathbf{R}^{q+1} \to \mathbf{R}^r$ が存在するための必要条件を述べる. p < q とする.

$$x=(x_1,\ldots,x_{p+1})\in\mathbf{R}^{p+1},\ y=(y_1,\ldots,y_{q+1})\in\mathbf{R}^{q+1},\ a_{ij}\in\mathbf{R}^r$$
 を用いて

$$F(x,y) = \sum_{i=1}^{p+1} \sum_{j=1}^{q+1} a_{ij} x_i y_j$$

と表すとき , ||F(x,y)|| = ||x|| ||y|| から

(*)
$$\begin{cases} \langle a_{ik}, a_{il} \rangle = \delta_{kl}, \\ \langle a_{ik}, a_{jk} \rangle = \delta_{ij}, \\ \langle a_{ik}, a_{jl} \rangle + \langle a_{il}, a_{jk} \rangle = 0 & (i \neq j, k \neq l). \end{cases}$$

(*) の上の 2 つの式から,任意の k_0 $(1 \le k_0 \le q+1)$,あるいは i_0 $(1 \le i_0 \le p+1)$ に対して $\{a_{ik_0}\}_{i=1}^{p+1}$ も $\{a_{i_0k}\}_{k=1}^{q+1}$ も \mathbf{R}^r の正規直交基底になる.よって $q+1 \le r$. $\{a_{ij}\}_{1 \le i \le p+1, 1 \le j \le q+1}$ の元の個数(=(p+1)(q+1))が r より小さければ,F の像は $\{a_{ij}\}$ が張る r より次元の低い線型部分空間に含まれてしまう.よって F が full ならば, $r \le (p+1)(q+1)$.

したがって $p \leq q$ のとき $F: \mathbf{R}^{p+1} \times \mathbf{R}^{q+1} \to \mathbf{R}^r$ が full orthogonal multiplication ならば $q+1 \leq r \leq (p+1)(q+1)$.

次に Parker([2]) にならって , $F: \mathbf{R}^{p+1} \times \mathbf{R}^{q+1} \to \mathbf{R}^r$ に対して $(p+1)(q+1) \times (p+1)(q+1)$ 行列 G(F) を

$$G(F) := \begin{bmatrix} I_{q+1} & A_{12} & \cdots & A_{1p+1} \\ A_{21} & I_{q+1} & \cdots & A_{2p+1} \\ \vdots & \vdots & & \vdots \\ A_{p+11} & A_{p+12} & \cdots & I_{q+1} \end{bmatrix}$$

で定義する. ただし, A_{ij} は $(q+1) \times (q+1)$ 行列でその成分は

$$(A_{ij})_{kl} = \langle a_{ik}, a_{jl} \rangle, \quad 1 \le k, l \le q + 1.$$

であたえられるものとする.(*) の3つ目の式から $A_{ji}=-A_{ij}$ が成り立つことに注意. $\det G(F)$ は $\{a_{ij}\}$ から決まるグラムの行列式に一致するので $\mathrm{rank}\ G(F)=r$.

とくに p=1 のとき次の結果が成り立つ.

補題 1 . full orthogonal multiplication $F: \mathbf{R}^2 \times \mathbf{R}^{q+1} \to \mathbf{R}^r$ が存在するための必要十分条件は , r が $q+1 \le r \le 2q+2$ を満たす偶数になることである .

証明. $F: \mathbf{R}^2 \times \mathbf{R}^{q+1} \to \mathbf{R}^r$ が (full) orthogonal multiplication ならば r が偶数であること.

 $A = A_{21}$ とすれば

$$G(F) = \left[\begin{array}{cc} I_{q+1} & -A \\ A & I_{q+1} \end{array} \right].$$

 $v\ (
eq 0)\in {f R}^{2q+2}$ が $\ker G(F)$ の元であると仮定する.縦ベクトル $v_1,v_2\in {f R}^{q+1}$ を用いて $v=\left(egin{array}{c} v_1 \\ v_2 \end{array}
ight)$ と表せば

$$v \in \ker G(F) \iff \begin{cases} v_1 = Av_2, \\ Av_1 = -v_2. \end{cases}$$

よって $\tilde{v}=\begin{pmatrix} -v_2\\v_1\end{pmatrix}$ とおけば $\tilde{v}\in\ker G(F)$ であり , $v\neq 0$ ならば v と \tilde{v} は 1 次独立である.したがって $\ker G(F)$ は偶数次元になる.よって次元定理から $r=\operatorname{rank} G(F)$ は偶数次元である.

r が偶数ならば (full) orthogonal multiplication $F: \mathbf{R}^2 \times \mathbf{R}^{q+1} \to \mathbf{R}^r$ が存在すること . orthogonal multiplication $F_1: \mathbf{R}^2 \times \mathbf{R}^2 \to \mathbf{R}^2, F_2: \mathbf{R}^2 \times \mathbf{R}^2 \to \mathbf{R}^4$ を

$$\begin{cases}
F_1(x,y) = (x_1y_1 + x_2y_2, x_1y_2 - x_2y_1), \\
F_2(x,y) = (x_1y_1, x_1y_2, x_2y_1, x_2y_2)
\end{cases}$$

で定義する. ただし, $x=(x_1,x_2), y=(y_1,y_2).$ F_1,F_2 は full で

$$||F_1(x,y)|| = ||F_2(x,y)|| = ||x|| ||y||.$$

を満たす.これらを利用して次のように orthogonal multiplication を構成する.

q+1=2k のとき.

 $\mathbf{R}^{q+1} = \mathbf{R}^2 \oplus \cdots \oplus \mathbf{R}^2$ と k 個に分解して i (0 < i < k) に対して

$$F = \overbrace{F_1 \oplus \cdots \oplus F_1}^{i} \oplus \overbrace{F_2 \oplus \cdots \oplus F_2}^{(k-i)}$$
 個

とすれば orthogonal multiplication $F: \mathbf{R}^2 \times \mathbf{R}^{q+1} \to \mathbf{R}^{2(q+1-i)}$ が得られる.したがって $q+1 \leq r \leq 2q+2$ を満たす偶数 r に対して orthogonal multiplication $\mathbf{R}^2 \times \mathbf{R}^{2k} \to \mathbf{R}^r$ が存在する.

q+1=2k+1 のとき.

 $\mathbf{R}^{q+1} = \mathbf{R}^{2k} \oplus \mathbf{R}$ と分解して $F: \mathbf{R}^2 imes \mathbf{R}^{2k} o \mathbf{R}^r$ を用いて $\tilde{F}: \mathbf{R}^2 imes \mathbf{R}^{2k+1} o \mathbf{R}^{r+2}$ を

$$\tilde{F}((x_1, x_2), (y_1, \dots, y_{2k}, y_{2k+1})) = (F((x_1, x_2), (y_1, \dots, y_{2k})), (x_1 y_{2k+1}, x_2 y_{2k+1})),$$

で定義すればよい.ただし, $(x_1,x_2) \in \mathbf{R}^2$, $(y_1,\ldots,y_{2k},y_{2k+1}) \in \mathbf{R}^{2k+1}$. したがって $q+2 \le r \le 2q+2$ を満たす偶数 r に対して orthogonal multiplication $\mathbf{R}^2 \times \mathbf{R}^{2k+1} \to \mathbf{R}^r$ が存在する.

補題 2 . 次数 2 の固有関数写像 $f:S^m\to S^n$ から , 同じ次数の固有関数写像 $\varphi:S^{m+2}\to S^{n+r+2}$ が構成できる.ただし , r は $m+1\le r\le 2m+2$ を満たす偶数を動く.さらに f が full ならば φ も full である.

証明. $g:S^1\to S^1$ を $g(e^{i\theta})=e^{2i\theta}$ なる写像とする.この g と $f:S^m\to S^n$, および補題1の orthogonal multiplication $F:\mathbf{R}^2\times\mathbf{R}^{m+1}\to\mathbf{R}^r$ を用いて $\varphi:\mathbf{R}^{m+3}\to\mathbf{R}^{n+r+3}$ を

$$\varphi(x,y) = (g(x), f(y), \sqrt{2}F(x,y)) \qquad (x,y) \in \mathbf{R}^2 \times \mathbf{R}^{m+1}$$

で定義すると $\|\varphi(x,y)\|^2=\|(x,y)\|^4$ が成り立つので $\varphi:S^{m+2}\to S^{n+r+2}$ は次数 2 の固有関数写像をあたえる .

補題 3 . (Gauchman-Toth [1]) $f:S^m \to S^n$ を次数 2 の固有関数写像とするとき

$$\varphi(x,y) = \left(\frac{\sqrt{m(m+2)}}{m+1}f(x), \frac{m+2}{m+1}\left(y^2 - \frac{\|x\|^2 + y^2}{m+2}\right), \sqrt{\frac{2(m+2)}{m+1}}yx\right)$$

とおけば , $\varphi:S^{m+1}\to S^{m+n+2}$ は次数 2 の固有関数写像である . ここに $(x,y)\in\mathbf{R}^{m+1} imes\mathbf{R}$. 特に f が full ならば φ も full である .

証明.直接計算で確かめられる.

命題. (1) (i) n=4, あるいは $7\leq n\leq 19$ に対して full な次数 2 の固有関数写像 $\varphi:S^5\to S^n$ が存在する.

- (ii) $11 \le n \le 26$ に対して full な次数 2 の固有関数写像 $\varphi: S^6 \to S^n$ が存在する.
- (2) k > 3 とする.
- (i) $k^2+3k-10\leq n\leq 2k^2+5k+1$ に対して full な次数 2 の固有関数写像 $\varphi:S^{2k+1}\to S^n$ が存在する .
- (ii) $k^2+5k-7\leq n\leq 2k^2+7k+4$ に対して full な次数 2 の固有関数写像 $\varphi:S^{2k+2}\to S^n$ が存在する .

注意.(1) full な次数 2 の固有関数写像 $\varphi:S^3\to S^n$ が存在する必要十分条件は,n=2, あるいは 4< n< 8 となることである.

(2) Gauchman と Toth ([1]) は full な次数 2 の固有関数写像 $\varphi:S^4\to S^n$ が n=4,7 あるいは $9\le n\le 13$ に対して存在することを示した .

固有関数写像は一般にはめ込みとは限らない.実際,

$$\varphi(x, y, u, v) = (x^2 + y^2 - u^2 - v^2, 2xu, 2xv, 2yu, 2yv)$$

を考えれば, $\varphi:S^3\to S^4$ は次数 2 の固有関数写像であり, $\varphi(x,y,0,0)=(1,0,0,0,0)$ であるから,p=(1,0,0,0,0) に対して $\varphi^{-1}(p)$ は S^1 分の自由度をもつ.したがって $v\in T_pS^3$ を $\varphi^{-1}(p)$ に接する方向に選べば, $(d_p\varphi)(v)=0$ である.したがって φ ははめ込みではない.

最近 Tang によって次のことが示された.

補題 4. $({
m Tang}\ [3, {
m Lemma 3.6}])$ 次数 2 の固有関数写像 $\varphi:S^m\to S^n\ (m\le n)$ がはめ込みであるための必要十分条件は,任意の点 $p\in S^n$ に対して p の逆像 $\varphi^{-1}(p)$ が空集合か,あるいはちょうど 2 点のみ含むことである.

系. $({
m Tang}\ [3,\ {
m Proposition}3.7,\ 3.8])$ 補題 2 ,3 において $f:S^m\to S^n\ (m\le n)$ がはめ込みであるならば,それぞれの φ もはめ込みである.

これらの結果から次が得られる.

定理 . $k \geq 2$ とする . 次の球面の間に , full な次数 2 の固有関数写像でかつ , はめ込みになるものが存在する .

- (i) $\varphi: S^{2k-1} \to S^n$ $(k^2 + k 1 \le n \le 2k^2 + k 2)$.
- (ii) $\varphi: S^{2k} \to S^n$ $(k^2 + 3k < n < 2k^2 + 3k 1).$

注意 . 定理の n の上限は , full な次数 2 の固有関数写像が存在するための最大次元と一致する .

証明.補題4から次の4つの固有関数写像がはめ込みになることがわかる.

$$f_5: S^3 \to S^5:$$

$$f_5(x, y, u, v) = (x^2 - y^2, u^2 - v^2, 2xy, 2uv, \sqrt{2}(xu + yv), \sqrt{2}(xv - yu)),$$

$$f_6: S^3 \to S^6:$$

$$f_6(x, y, u, v) = \left(\frac{1}{\sqrt{2}}(x^2 + y^2 - u^2 - v^2), \frac{1}{\sqrt{2}}(x^2 - y^2), \frac{1}{\sqrt{2}}(u^2 - v^2), \sqrt{2}xy, \sqrt{2}uv, \sqrt{3}(xu + yv), \sqrt{3}(xv - yu)\right),$$

$$f_7: S^3 \to S^7:$$

 $f_7(x, y, u, v) = (x^2 - y^2, u^2 - v^2, 2xy, 2uv, \sqrt{2}xu, \sqrt{2}xv, \sqrt{2}yu, \sqrt{2}yv),$

$$f_8:S^3\to S^8:$$

$$f_8(x, y, u, v) = \left(\frac{1}{\sqrt{3}}(x^2 - y^2), \frac{1}{\sqrt{3}}(x^2 - u^2), \frac{1}{\sqrt{3}}(x^2 - v^2), \frac{1}{\sqrt{3}}(y^2 - u^2), \frac{1}{\sqrt{3}}(y^2 - v^2), \frac{1}{\sqrt{3}}(u^2 - v^2), \frac{2\sqrt{2}}{\sqrt{3}}xy, \frac{2\sqrt{2}}{\sqrt{3}}xy, \frac{2\sqrt{2}}{\sqrt{3}}xv, \frac{2\sqrt{2}}{\sqrt{3}}yv, \frac{2\sqrt{2}}{\sqrt{3}}yv, \frac{2\sqrt{2}}{\sqrt{3}}uv\right).$$

したがって補題 3 から $10 \le n \le 13$ に対して,full な次数 2 の固有関数写像 $\varphi: S^4 \to S^n$ が得られるが,系からこれらはすべてはめ込みである.

以下,帰納法を使う.

 full な次数 2 の固有関数写像ではめ込みになるものが , それぞれ次の次元のペアに対して存在すると仮定する .

$$\begin{cases} S^{2k-1} \to S^n, & \alpha_{2k-1} \le n \le \beta_{2k-1}, \\ S^{2k} \to S^n, & \alpha_{2k} \le n \le \beta_{2k}. \end{cases}$$

k=2 のときは上に述べたことから , $\alpha_3=5, \beta_3=8, \alpha_4=10, \beta_4=13.$

1つ目の仮定に補題 3を 2 度適用することによって, $\alpha_{2k-1}+4k+3\leq n\leq \beta_{2k-1}+4k+3$ なる n に対して full な次数 2 の固有関数写像 $\varphi:S^{2k+1}\to S^n$ ではめ込みになるものが存在することがわかる.一方,1つ目の仮定に補題 2 を適用して $\alpha_{2k-1}+2k+2\leq n\leq \beta_{2k-1}+4k+2$ なる n に対して full な次数 2 の固有関数写像 $\varphi:S^{2k+1}\to S^n$ ではめ込みになるものが存在することがわかる.結局, $\alpha_{2k-1}+2k+2\leq n\leq \beta_{2k-1}+4k+3$ なる n に対して full な次数 2 の固有関数写像 $\varphi:S^{2k+1}\to S^n$ ではめ込みになるものが存在する.したがって

$$\begin{cases} \alpha_{2k+1} = \alpha_{2k-1} + 2k + 2, \\ \beta_{2k+1} = \beta_{2k-1} + 4k + 3 \end{cases}$$

が得られる.ところで $\alpha_3=5,\ \beta_3=8$ であるからこれを解いて

$$\alpha_{2k-1} = k^2 + k - 1, \ \beta_{2k-1} = 2k^2 + k - 2.$$

同様にして,2つ目の仮定に補題 3 を 2 度適用することによって, $\alpha_{2k}+4k+5 \le n \le \beta_{2k}+4k+5$ なる n に対して full な次数 2 の固有関数写像 $\varphi:S^{2k+2}\to S^n$ ではめ込みになるものが存在することがわかる.一方,2 つ目の仮定に補題 2 を適用して $\alpha_{2k}+2k+4 \le n \le \beta_{2k}+4k+4$ なる n に対して full な次数 2 の固有関数写像 $\varphi:S^{2k+2}\to S^n$ ではめ込みになるものが存在することがわかる.結局, $\alpha_{2k}+2k+4 \le n \le \beta_{2k}+4k+5$ なる n に対して full な次数 2 の固有関数写像 $\varphi:S^{2k+2}\to S^n$ ではめ込みになるものが存在する.したがって

$$\begin{cases} \alpha_{2k+2} = \alpha_{2k} + 2k + 4, \\ \beta_{2k+2} = \beta_{2k} + 4k + 5 \end{cases}$$

が得られる.ところで $lpha_3=10,\;eta_3=13$ であるからこれを解いて

$$\alpha_{2k} = k^2 + 3k, \ \beta_{2k} = 2k^2 + 3k - 1.$$

注意 . $\operatorname{Tang}([3])$ も次数 2 の固有関数写像でかつ , はめ込みになるものの存在を証明している .

参考文献

- [1] H. Gauchman and G. Toth, Constructions of harmonic polynomial maps between spheres, Geom. Dedicata **50** (1994), 57–79.
- [2] M. Parker, Orthogonal multiplications in small dimensions, Bull. London Math. Soc. 15 (1983), 368–372.
- [3] Z. Z. Tang, New constructions of eigenmaps between spheres, Internat. J. Math. 12 (2001), 277–288.
- [4] K. Ueno, Some new examples of eigenmaps from S^m into S^n , Proc. Japan Acad. **69** (1993), 205–208.
- [5] P. Y. H. Yiu, Quadratic forms between spheres and the non-existence of sums of squares formulae, Math. Proc. Camb. Phil. Soc. **100** (1986), 493–504.